

「宇都宮大空襲^{くうしゅう}を体験して今思うこと」

山口スミ

小雨のしとしとと降る、人々の寝静^{ねしず}まった昭和20年7月12日、宇都宮の中心部はB29の空襲^{くうしゅう}を受けた。この燃えさかる炎^{ほのお}の中私は逃^にげまわった。小学4年生の夏のことである。現在79歳^{さい}の私の70年前の出来事である。

しかしこの忘れられぬ空襲^{くうしゅう}の前後^{だれ}のことは今まで誰にも話したことはなかった。いや、話す気にもなれなかった。忘れようにも忘れられなかったのに。夫にも自分の子供にも教職^{こうしつ}にあった頃の教え子達にも語れなかった。

でも今年になり市役所の方から「宇都宮での空襲^{くうしゅう}を体験し栃木に移ったとのこと、その頃^{ころ}の事を児童たちに話してください」との要望を頂き、思い切って自分に問いかけてみた。あの忌まわしい体験を胸にしまい、終わってしまっても良いのか。次世代の、戦争を知らぬ児童達にこそ、話しておくべきではないのかと、決心した。

我が家は、私の遊び場^{ふたあらしんじんじゃ}だった二荒山神社からJR宇都宮駅^{うつみやま}の方向に歩いて5分くらいの家混みの中^{うち}にあり、お寺も近くにいくつかあ

った。

あの日、朝から雨が降っていたので大人達は「今日空襲はないからゆっくり寝よう」と言い電燈でんとうに黒い布かぶねを被せ寝こんだ。

少し経って母親と祖母の大きな声で目を覚ました。真昼のような外の明るさ、2階から祖母がころがる様に降りて来た。母は下の弟を背負い、半纏はんてんを頭からかぶせ外へ走り出た。一面真っ赤な火の粉ほのおと炎ひたの中で、母は家の前の防火用水はんてんに半纏はんてんをぎぶんと浸し頭にかけて、祖母は私と弟さけが叫んでいるのに、隣となりの子供を私達かんちがと勘違いし手を引いて前を走っていった。

50メートル位離れたお寺の墓石の間に身を伏せた。頭すれすれに急降下しながらの機銃掃射きじゅうそうしゃ、バリバリ、体のすぐ横を弾が走っていく。横を見ると焼夷弾しょういだんから花火のような明かりがパッパッと降ってきて伏せている人間は機上から丸見えのようだ。石塔せきとうの下敷きしたじにならぬよう大人達は「ごめんなさい。ごめんなさい」と倒していった。

それから数時間、爆音ばくおんも聞こえなくなっただけで恐るおそるお寺の本堂に行ってみた。お寺の回廊かいろうを首のない赤ちゃんを背負い気が狂ったように叫び回っているお母さんがいた。横を流れる田川には炎ほのお

を避け川に飛び込んで亡くなり沢山の人が浮いていた。通っていた東国民学校に行ってみた。校庭いっばいに運ばれた死体が重なっていた。火をつけ焼きはじめていた。あの異臭は昨日のことの様に染みついている。学んでいた校舎の姿も無くなっていたのも少し経ってから気付いた。足元に真っ黒な炭の様になっている大小の母子らしい姿もころがっていた。

家族5人（父は出征し、満州からシベリアへ、私が高校生の時復員してきた。）留守を守っていたものの無事確かめ、住んでいた家に行ってみた。建っている物は何も無い。何かが燻りチョロチョロと燃えていた。あの時の気持ちは筆には尽くせない。子供ながら立ってられない脱力感不安感に涙は出なかった。ただじっと立ちすくんでいた。誰も声を発することもなく。

後日聞くところによると早く目覚め、遠くに逃げた人々は遠巻きに落とされていた不発弾300発により命を失くしたり、防空壕に逃げ込み入口の木材の火災と煙に焼け死んだり市内で620人以上の人が亡くなった。

半日位しておにぎりの配付があるというので行ってみた。あの時のおにぎりの味は全然覚えていない。手に持ったら砂のようにくだ

けてしまった事は覚えている。

母は父^{しゅっせい}出征の後、子供達が助かったのだからまた今夜にも続いて来るかもしれない空襲^{くうしゅう}を恐れ、いつときも早く宇都宮^{はな}を離れねばと思ったそうだ。

翌日荷台付トラックで迎えにきてくれた。栗野町^{あわのまち}と栃木市の親戚^{しんせき}に分かれ引き取られた。母は罹災^{りさい}証明書をもろうため青空市役所に数日並びやっと後日栃木に来た。役所職員も居ず、台帳や用紙も無く、手書きのものをもらったという。

あと1か月終戦が早ければ家も焼かれず、仲の良かった友人達とあの宇都宮東校に居られたのに…。あれから50年経ち、ちりぢりになって住所も解^{わか}らぬ同級生が宇都宮に集まった。恩師が私の住所を調べ、高校の授業中栃木に会いに来てくれた。あのクラス会の後、毎月のように宇都宮には行っていたのに家のあった清水町には一度も足を向けられなかった。クラス会の後、思い切ってひとり見知らぬ人の住んでいる我が家の跡^{あと}に立ち止まった。筆につくせぬ思いが走った。逃げ込^{にこ}んだお寺に立ち寄ってみた。すっかり本堂もきれいになり、庭は幼稚園^{ようちえん}となり元気な幼児の声が響いていた。あの日と同じしとしとと雨が降っていた。これで私の本当の戦後が始まるの

だと思った。

負けて終戦。いろいろな情報が次から次へと入ってきた。米軍^{べいぐん}5、60機、対する日本機たったの2機という。宇都宮^{くうしゅう}空襲から終戦までの1か月間に37の街が空襲^{くうしゅう}にあったという。米軍の撒いたビラには「都市より退避^{たいひ}せよ」。ともあった。読んでならぬと回収を避^さけたのをとっておいたという。

身寄り不明の80体の霊^{れい}が共同墓地に収められ、現在も毎朝供養されているという。

ペンを置くにあたりユネスコ憲章の序文「戦争は人の心の中で生まれるのですから、人の心の中に平和のとりでを築かねばなりません」を全世界の人々と共に心に刻みたい。

◎ 体験談を聞いた千塚^{ちづかしょう}小6年生の感想文を抜粋^{ぼつすい}して紹介します◎

- ・ 戦争は、人の心を傷つける、大きな悲劇^{ひげき}をもたらすものだから、絶対にしてはいけないなと思いました。
- ・ 今回のお話を聞いて、戦争の本当の怖さ、平和のありがたさをあらためて考えさせられました。今、とても平和です。それは、戦争にあった方々が立ち直してくれたからだと思います。毎日、御

飯が食べられる。学校に行ける。このような一つひとつの「あたりまえ」に感謝したいです。

- ・ 今生きていて家族や友達がいて学校で勉強できることはとても幸せな事だと思いました。
- ・ 二度と戦争が起こらないようにするために、スミさんから教えていただいた話を自分の子や孫に語りついで戦争のこわさを伝えたいと思います。



市街地は焼野原
二荒山の山だけが目立つ



戦争の悲惨さのシンボル
枯死した宇都宮の大ケヤキ



千塚小6年生に戦争体験をお話ししたときの様子